

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

奈良市街から北東へ車で10分あまり、笠置へ通じる道筋の奈良市南庄町に「腰痛地蔵」と呼ばれる小さなお堂がある。南庄は大和高原北部の静かな農村で、9月初旬には稻刈りも始まっている。吹き抜けのお堂の中央には、舟形光背に阿弥陀仏を浮き彫りした石仏と、阿弥陀の梵字「キリク」を刻んだ板碑が立っている。

この石仏の両脇と背後には、至る所に手作りの木槌がびっしりと並んでいる。以前訪れた時には石仏の前に板を並べてその後の上に木槌が並んでいたが、いまは左右の棚と背後の三段の棚に、石仏を囲むように木槌が並べられており壯觀である。腰の痛い人はこれを持ち帰って腰を叩き、治れば新たに木槌を一つ作って、借りてきたものと一緒に奉納する。南庄の集

落は現在21戸。毎年7月の地蔵盆に境内ごとに交代で祭りをしてきたが、今は海の日か日曜日に行われている。朝から掃除や準備をし、夕方からお祭りをして子供にはお菓子を与える。この地蔵盆に土地の人が手作りの木槌を奉納する慣わしであったが、次第に腰痛地蔵がマスコミによる報道などで知られ、集落外から木槌の奉納が増えてきたので、地元からの奉納は控えているという。

数を数えてみると、2

53個奉納されていた。

高さ(長さ)10cmほどの小さなもののから、90cmに達する大きなものまである。大半は20cmくらいの高さだが、柄の長短、太い細いなど実にさまざまである。「奉納」と記し



奈良市南庄町の腰痛地蔵—2022年9月、勺櫛子さん撮影

腰痛癒やす木槌の信仰

て、年月日や奉納者の名前、居住地が書き付けてある。実は平成17(2005)年に、筆者も余材で太く短い木槌を作つて奉納したことがある。ありがたいことに背後の棚

に残っていた。奉納者の書き付けを見てみると、南庄を中心として、周辺の集落、さらに奈良市内外などから奉納されていて、支える石の柱には

現は足腰の痛みや腰から下の病に効験があるとき、神社の木槌を借り受け、愚部をさすり平癒を祈る。その願掛けの期間は21日間とされ、病気が治れば新たに木槌を一つ

作り、借りたものとあわせて神社に返すしきりだった。

木槌は、材質により木槌や金槌、大きさから大槌・小槌、形態からは横杵・棒槌状の小型のものが木槌で、杭打ち用の大型のものはカケヤ(掛矢)と呼ばれる。柄が一本で作られたものは横槌とされるが、この横槌は、出土例が弥生時代まで遡る古物から道具だった。打つたり、叩いたりすることで、叩かれたモノが自然で、刻々と変化していくことで、叩かれたモノが自然と見張っただけではな

く、その木槌を用いて、一寸法師は一人前以上の背丈を取り戻し、大黒さまは財貨をもたらし人々を幸せにする話も生まれたのだろう。

(奈良民俗文化研究所代